

大西巨人氏から見た石川淳文学——大西巨人氏インタヴュー——その二

山口 俊雄

はじめに

大西巨人氏の石川淳言及一覽

大西巨人氏インタヴュー

大西巨人

狩野啓子

杉浦晋

鳥羽耕史

山口俊雄

山口俊雄

(一) 石川淳について

漢詩集／福岡高校での石川淳の語られ方／石川淳の反俗／『文芸展望』編集者
時代／石川淳『寒露』『かよひ小町』／太宰治／石川淳『鷹』など／文革批判
声明／石川淳『普賢』『森鷗外』

*ここまでの部分は、別途、愛知県立大学国文学会『説林』第五六号（二〇〇八年三月発行予定）に掲載、以下の部分を本誌に掲載する。

(二) 安部公房・杉浦明平について

安部公房／杉浦明平

(三) 大西巨人文学について

『神聖喜劇』／版元の選択／談話屋開業

大西巨人氏インタビュー（承前）

（二〇〇七年三月九日、さいたま市中央区円阿弥、大西巨人氏宅にて）

聞き手

狩野啓子（久留米大学教員）

杉浦 晋（埼玉大学教員）

鳥羽耕史（徳島大学教員）

山口俊雄（愛知県立大学教員）

〔テープ起こし・平野詩穂里（愛知県立大学学生）〕

* 石川淳研究会のメンバー四名が、石川淳を中心とする近現代文学について、大西巨人氏に試みたインタビューの記録である。公表するにあたっては、大西氏の一閱を受けた。

* 引用文については、原則として最新の版本を底本とした。

* 注は、特に断りのないものは山口による。

（二）安部公房・杉浦明平について

安部公房

鳥羽 私は安部公房を専門に研究しているのですが、安部公房は、石川淳の弟子でもあり、それから花田清輝の弟子でもあったと思うのです。安部公房は、大西さんの『天路の奈落』の最初のヴァージョンである『天路歷程』を連載された『現代芸術』の編集長でもあったのですが、そういう安部公房に対する関係は、どういう風に感

じていらしたんですか。

大西 安部公房に初めて会ったのは、埴谷雄高の家で、私はまだ九州に住んでいて、『終りし道の標べに』を安部公房が書いたころ64ですね。いきさつがあつて東京に来たときですが、最初は杉並の荒正人の家に、娘さんの荒このみさんがまだ小さい頃で、荒さんは彼のお父さんと同居で大きな家、その二階に泊まっていたのですが、荒も面白い人で、父親といろいろなんか事情があつたんでしよう、泊めてもらうことができなくなって、埴谷のところへ泊まりに行つてくれということ、それで埴谷の家に行きました。

埴谷は、埴谷夫人と二人暮らしたつたろうと思います。埴谷の家は大きな家じゃないんですけどね、そこで、書齋の三方から三人で、雑魚寝みたいにして泊まつてたんです。その時、ある日そこへ来たのが安部公房でね。安部公房はちょうど『終りし道の標べに』を発表した後でしたがね。それで、紹介されてちよつと話をして……。安部に直接に会ったのはあの時と……。まあ何べんか会いましたが……。その頃、安部は野方にいたよ。野方に住んでいたことがありましたね。65

大西 野方についてね……。その安部の家に後で井上光晴が住んだんじゃないかな、確か……。それでその頃のことですね、安部のところへ行つたら、……。金を借りに行ったんじゃないかな、安部は床屋に行つていてとかで、床屋で待つていたような……。その時に安部が五千円だったか貸してくれて、まあ、のちになつてお返ししましたが。ああ、お返しした時に、『神聖喜劇』のカップ・ノベルス版が出て（一九六八〜六九）、贈つたら、お礼状が来て、「言わば利子までつけてもらつて、少ししか貸してなかったから、こつちが恥ずかしいぐらいた」と言つて、「ところで、あの『神聖喜劇』は『真空地帯』よりだいたいぶ上等である」とか書いた手紙をくれて……。安部のあの『第四間水期』（一九五八〜五九）、あれなんかも推理小説がかったようなね、あれは、ロブ・グリエを思わせるようなものがあつた。

それから、安部は、言わば花田の弟子やろ。花田からもちよいちよい話を聞いてたが……。ある時、スター

リンが演説して、革命をやってそれでソヴィエト体制になって、第二次大戦に勝って日露戦争の復讐を日本に果たしたと、そういう演説をしたらしいという話になってね。中野重治が、白井吉見らと『展望』で座談会をやった時に、スターリンがそんなことを言ったらその日から政治ができなくなるはずだと言っていたのだが、ところが、スターリンの演説の翻訳が出て、その中にそんな言葉がちゃんと入っている。それで、花田は、『新日本文学』の編集長だったから、この次は大西がスターリン批判を書くんだと安部に言ったんだ。そしたら、安部君がそれは危険だからやめたほうがいいって止めたという話があつて……、その頃、安部はいわゆる『人民文学』派だったね。何だか私はあまり好きじゃなかったな、その意味で。その頃はね。

鳥羽 ええ。

大西 その内に、だんだんこう、彼も腑に落ちなくなつたんだろう……。それで『第四間氷期』の時期とかになるともう別の、そうじゃなかったかね……。あれも、しかし、有能の士ではあるけどね。

あの、自動車乗って行く作品は何だったかな……。主人公が自動車乗って……。

……とにかくね、その頃、文学の話じゃないけど、新日本文学会で自家用車に乗ってるのは、安部君だけだと。やっぱりね、生活においてなかなか先進的だったよ。

あれは、チェーンの特許かなんか持っていて……。

鳥羽 ええ、持っていました。

大西 それは、どうなったの。

鳥羽 西武百貨店で、一時期まで売ってたらしいんですが、今では買えないらしいですね。

狩野 花田清輝の名前が出ましたが、大西さん、花田清輝とは、福岡の縁で何かお話をさつたということはありませんか。
大西 うーん、いやないね。福岡ね、あれは福岡どころか、中学が同じなんだよ、福岡中学で。だけどね、私が入った時にはもういないんだから……。だから、中学校が同じということは、戦後に知ったわけです。

狩野 では、福岡のことが、話題にはあまり出て来ない。

大西 うん、出て来なかった。

それで花田が、埴谷はあれは家柄が家老とかなんとかで、奥州の方のね。その一方、花田は、あれは家老なにかじゃないんですよ、武士ではあるけど。「だから、埴谷が自分の方が家老の家柄だということで、俺をちよつと軽蔑してるんだ」とか、冗談で言ってたんですけどね。花田は、面白い男だったなあ。

狩野 安部公房は、満州でしたっけ、大陸の方から来てるんですよ。なんか気風が違うなあっていう感じがありましたか。

大西 いやそんなことなかったですよ。

狩野 評論集『砂漠の思想』（一九六五）とか読むと、なんかこう、一般の日本人とかなり感性が違うのかなあとか。大西 いや、そんなことはなかったですよ。一般の日本人と違うところはあるかもしれないけれど、違和感はなかったですね。話をしていて。直接には、あまり接触はなかったですけどね。

鳥羽 記録芸術の会をやった時なんかあまり、編集者と執筆者ということで直接のやり取りではなくて、郵便でのやり取りとか……。

大西 少し前に解散した『新日本文学』でやっていた小沢信男君、彼が、原稿取りに来たよ、大宮に。

杉浦 安部公房の作品の中で、例えば、これは評価できる、好きだ、あるいは、これは評価できない、嫌いだ、というものはありますでしょうか。

大西 うーん、……あれなんか、やっぱりいい方じゃないだろうか、『第四間氷期』なんかは。

狩野 『砂の女』（一九六二）みたいな作品は、お嫌いですか。

大西 『砂の女』ねえ……。

狩野 あのタイプはあまり……ですか。

大西 いや、そうではないですよ。『砂の女』はまたもういっぺん読もうと思って、枕元にね、文庫本を三年ぐらい置いたまま……。

狩野 もういっぺん読もうというお気持ちがあるわけですね。

大西 それはあります。あるのが一つと、自分がちよつと考えていることってね、安部君の『砂の女』がちよつと参考になるといふような感じがあつて、それで置いているんですけどね、なかなか読まないんですよ、この頃。

以前は、原稿書く時、同じぐらいのページ数を読まんとは原稿書かなかつたのですよ。例えば通俗小説、例えば時代小説とか推理小説とかを読んだあと、頭をクリアしないとイケない。元は、原稿をスローモーにしろとにかく書こう思つたら、その前に、何かそうじゃない小説を読んで、言わば襖をしてそれから筆を取るといふことをしていた。しかし、この頃、それがなくなつて、本を読まなくなつてしまつて……。

ただ、私の考えでは、小説は、本来は全部推理小説だといふ考えがある。といふのは、物事を探求して、追求していくんだから。それで『三位一体の神話』（一九九〇〜九二）なんていふのは形として推理小説で……、『迷宮』（一九九四〜九五）もそうですね。まあ、今後もそういうつもりですがね。

狩野 『深淵』（二〇〇四）もそうですよね。

大西 全部。『神聖喜劇』だつて推理小説ですからね。

杉浦明平

鳥羽 話は変わりますが、大西さんはお書きになつていないと思うんですけど、杉浦明平さんが、東京とは別の、愛知の渥美半島という拠点を持って、そこで文学活動をやつていて、共産党にも関わっていました。彼のことについては、大西さんはどういふ風に思つていらしたか、そういうこともちよつと聞いてみたいと思つていた

んですが。

大西

明平さん……。あの人も因縁があつてね。妙なことで、あの明平という人は私が九州にいた時に、花田がやつてる『総合文化』⁶¹に志賀直哉論というものをね、『学習院と渡良瀬川鉞毒事件』という題だったかな、志賀直哉のことを論じて……。⁶²そしたら手紙が来て、その前に明平さんが志賀直哉論を書いてましてね、明平も大分志賀を批判してるんですけど、それで、本当のことかどうか知らないけれど、「自分の書いた志賀直哉論を志賀直哉が喜んだそうさ。君を読めばなお喜ぶだろう。そしてまた志賀直哉論を書いた。今度は君の志賀直哉論を少し盗んで書きました」というような手紙をくれてね。⁶³

それから、『精神の氷点』を『世界評論』に載せた時に、『世界評論』の編集をやつてたのは青木滋、のちの青地農ですが、その人が、九州にいた私に、突如として、五十枚の短篇を頼んで来たんです。その時、大西の小説を是非ともという働きかけをしたのは、明平さんです。

それから、新日本文学会で、一時期、私は経理部長をやりました。「お前がやらないと誰もやり手がない、僕も加勢するよ」と花田に言われて、経理のことなんかわからなかったけれど、やりました。花田は、ほとんど加勢してくれなかったけどね。それで、私は先付け小切手とか、知ってるんですがね……。

ある時、幹事会員の金を、例えば岩波なりあるいは筑摩なり講談社なりから本を出しとつたらその印税を前借りして、会に貸す、という風なことが、常任幹事会なんかでそういう方針が決まって、それで、杉浦明平の本の印税から、十五万円の中の十万円なんです、その十万円の小切手を講談社から受け取って来て、それを、会の書記局の若い者が使いで行ったら、銀行から印鑑がいるということと言われたので、そのへんで売っている印鑑を買って、使いの若者がね、押してね……。⁶⁴

そのことを明平も私も知らないですよ。杉浦明平が講談社に行ったら、あなたの印税は、十万円は、新日本文学が借りている、前借りで、受け取り証がある、杉浦明平と書いてハンコも押したのが、となつてね。謀

書謀判、新日本文学会が謀書謀判をしてね。私が、経理部長でしょ。中野が、「君が経理部長なのだから、僕は知らないよ」と言うんだ。それで、どうにもこうにもならないので、その時初めて会いました。私は、明平とは、九州にいる頃から手紙では、先ほど言ったようなことから何度かやり取りがあったけれど、直接会ったことは一度もなかった。

明平はその当時の十五万円ですからね、印税を受け取りに上京して来てるんですよ。世田谷の定宿かなんかに泊まっついていて、そこにあやまりに行っってね……。のちに、大西が気の毒だったと、明平が人に言ったらしいけど……。「すみません」て私がお詫びを言っってね。あれは何回かに分けて返しましたが……。明平もわかってるけど、やっぱり腹立ってるでしょ、明平は明平で十万円も取られて……。あの時は、本当に困ったなあ……。

しかし、明平さんには、私は、悪い気持ちは持つてません。そういう事情ですから。

あのあと、『神聖喜劇』ができあがった時、とても喜んだようなハガキをくれました。「寝ないで読んだ」というようなことを書いて……。

だけど、あの人がその向こうで、渥美の方で云々ということについては、別に反対も何も感じなかったなあ。

(三) 大西巨人文学について

『神聖喜劇』

大西 ワープロになって変わったけど、もともと、私は、原稿を書くのがまるで習字をしてるみたいなんだ。普通なら上に線を引っ張っって、こう訂正を書き込むでしょう。それができない。訂正しようとする、その同じ文字

分の原稿用紙を貼り付けて、きれいに書く。『神聖喜劇』の時の、私の一つの努力はね、原稿を汚く書くということだった。それがとうとう成功しなかったがね。なんとか汚く書くこうと思って……。

狩野 『神聖喜劇』の何度も貼り直しされた原稿は今どこにあるんですか。生原稿は。

大西 それは私の倉庫にあります。

狩野 そうですか。

大西 その『神聖喜劇』の原稿は、『新日本文学』からもらってるんですよ。それで、そのはじめの方のを取ってる。

さつき言ったように、汚く書くことをなんとか成立させようというのが、努力目標だったんです。結局できなかったですけどね。『神聖喜劇』の中に男と女とが戯曲風に問答する場面があるでしょう。あれを書く時、いつも思ってたよ、汚く書くこうと。今日はもう汚く書く、汚くていいと思って書く。それで、あまりこだわらずに五枚書いたんですよ。しかし、そのあとはどうもいかん。あれは八十枚くらいあるでしょ。つまり、五枚は汚く書いたから一日でできたけど、結果としては八十枚だから長い間かかったわけです。成功しない。努力しただけで無駄だった。

でも、ワープロになったら、その点が楽ですな。

狩野 切って張るといふのは何度もなさったんですか。

大西 うん、何度も。

狩野 その原稿って本当に貴重ですね。虫に食われないよう、保管をきちんと、お願いしたい。

大西 だいたい、三十枚の原稿ができれば、書きくずしの原稿が三百枚くらいある。

光文社の窪田、濱井の両君が係で、そのおかげで、辛抱してできたんですけど、その彼らが、鞆にその書きくずしを持って帰ってごまかしているんですよ、皆を……。

一同（笑う。）

大西 そういうことをして、やっと二十何年かかかってできあがる。

最初、光文社と契約した時は、原稿がどれぐらいできあがった時だったか……既に七百五十枚くらい連載していたでしょうかね。その時のカッパ・ノベルスの編集長は、もう亡くなったけど、のちに祥伝社の社長になった伊賀弘三良（こうがひろさむ）という人で、その人が「いつ頃できあがるでしょうか」と言うから、「そうですねあ、今年の春か初夏です」と言った。その「今年の春か初夏」が、それから十五年。そういう風だから、とにかく、もう、まあ……………。

この頃は、本をいくらか出すからね、なんとなく早いように見えるけど、計算してみると、やっぱり同じようにね、年に二百枚ぐらいでしょうかな。

狩野 あの、決めてらっしゃるんですか、執筆の仕方を、だいたい午前中にやるとかを。

大西 いや、午前中は。昼まで寝ている。夜と昼と逆さま、だから今日も遅く三時とかに来てもらった。だいたいも

とから夜型ですけど、学生の時からね、夜更かし朝寝坊ちゆうような風でした。

昼間は、今日は少なくとも三枚は書こうというような気であるんだけど、一枚も書けない。夜になると、今日は昼間書けなかったから夜に書こうと思って、もう二時か三時になって、それがだんだん高じて来て、今もそうですが、朝寝るときは五時か六時です。

狩野 じゃあ、夜中じゅう起きてらっしゃるんですね。

大西 そして一枚も書けない。ふふ。そんな風ですからね。それで今日も遅く来てもらったんです。

狩野 『神聖喜劇』の原稿は、きちっと全部揃って持ってらっしゃるんですか。

大西 いや全部は持ってないですなあ。

狩野 出版社に渡したままというのものもあるんですか。

大西 『新日本文学』からもらったのは、一応、全部あるはずですよ。

狩野 どれぐらいのヴォリュームで……。

大西 このぐらいあるでしょうか（三十センチぐらいの高さを示す手のジェスチャー）。

狩野 やっぱりね、大事にしてもらったら……。それから、書き損じみたいなのも、できれば捨てずに……。 (笑)。

杉浦 研究者としての立場から……。 (笑)。

大西 私は、志賀直哉には概して批判的なんだけど、志賀直哉が、改造社から昭和の初めに出た『現代日本文学全集』

に書いた文章に、あの観音様の……

山口 法隆寺の夢殿の……。

大西 夢殿の観音を見ていると、作者が浮かんで来ない……という、この点については賛成でね。

死んだらともかく、生きてる間は、例えば、『深淵』なら『深淵』は大西巨人が書いたということでもいい。なぜ生きているうちはこれは私が書いたということになるかと言うと、責任があるから。何かがあつた時に、あんなことが書いてあるが、この責任者は誰かということになったら、それは私が書きましたと明らかにしなければならぬ。けどもう、死んだらね、だいたい誰が書いたかなんていうことは、誰も知らない、ただ、こういう作品がある、ということになったらそれに越したことはない、というのが私の考えですからね。もう書きくずしやら何やら、死ぬ前に全部処理してしまおう、と。

だいたい私は、人間は死んだらもうお終いと思つている。終わりだと。そのあとがないということですね。それが正しい唯物論だと思つてますから。

そういうことですから、『神聖喜劇』の原稿も、忘れぬうちに早く片付けとかななくてはいけない (笑)。

狩野 捨てたりしたら駄目ですよ。さつきおっしゃったような、汚いのにするのが嫌で貼り直したりして、そのプロ

セス、どういふ書き方をされたかが、原稿をみれば一目瞭然ですね。だから、面白いです。

山口　そうですね、ちよつと見てみたいですね。

大西　狩野さんたちを面白がらせるために残すわけにはいかなから（笑）。

山口　じゃあ、『三位一体の神話』のあの葦阿胡右が尾瀬路迂いくまひさあき おせみちゆきにやっみたいに、お宅に忍び込んで原稿を盗まないといけないですね（笑）。

大西　ああ、そうか……ははは。

山口　殺すほうはもちろんやらないですけど、盗むほうだけ真似して……。そうしないと、処分されてしまうと、もつたないですから。

版元の選択

山口　では少し話が変わりますが、大西さんは、光文社から『神聖喜劇』を出されて、それ以降ずっと光文社との縁は深いと思うのですけれども、光文社という会社は、今でもそうで、昔はおそらくもつとそうだったと思うんですが、あまり文芸書を、特にいわゆる純文学を出す出版社という風には見られてないと思うんです。

大西　変だろ。

山口　ええ……、あえて『神聖喜劇』を光文社から出版されたのは……。

大西　うん、それなら、その話を今しておこう。

ちよつと野人のひとが生まれた頃、生まれて血友病ということがわかる満一歳ぐらいの頃、私は大宮に住んでたんです。その頃『神聖喜劇』を書いていました……、『新日本文学』にはその頃は十一回ぐらい連載した頃の話ですがね、だいたい売れぬ作品ばかりだから、お金は今もないけど、それでも今はないと言つても何となく恰好がついてるような家に住んでますがね。しかし、これはちよつと種や仕掛けがあるんだけど、それにしてもま

あ借家ですからね。その頃は、ひどいもんで、やれ電灯代がないので電灯を切られる、ガスも水道も……というような状態で、細君が内職やってくれるということでもやってもらって、私がたまに原稿を書いて、原稿料、それも零細なものを……というような状態だったんだけど、それで、相変わらず夜遅くまで原稿書いたからって寝てたんですよ。

そしたら、細君が「朗報が来ましたよ」と言って、つまり、快ニュースが来ましたよ、ということ、往復葉書の速達を持って来たんですよ。その葉書に、「現在『新日本文学』に連載中の『神聖喜劇』は社内でも愛読している、ついでには他にお約束がなければ、ぜひ本社で出版したいから、お尋ねします」という内容で、それがその快ニュースなの。

ところがさつき言われたように一般的な光文社のイメージというのはあざとい仕事をするというものだからね、「何が快ニュースか」と言うて、即座に、「せっかくのお申し越しですが、先約がありますからお断りします」と、先約はないんですが、そう返事して……。そうしたら、それに返事が来て、ずっとあとに出版担当役員になった人で、もう今は定年退職したけど、佐藤隆三という人から、「それはたいそう残念だけれども、もし東京に出るような機会があったら本社にもお立寄りください」というような手紙かハガキかが来ました。

それから一ヶ月ぐらいがたって、新宿の厚生年金会館で、当時の日本共産党のいわゆる国際派、昔国際派と言われたところにいて、当時の臨時指導部から除名になって六全協があったけれども復帰しないような連中のグループ会議をやったのです。花田、野間、竹内実、安部公房……とにかく十人ばかりで、七時から始めて、九時には空けなくてはならないのだけれども、話そのものはまだ一段落に達してなかったから、それじゃあ、新宿の西口にあった「花風」とか言う沖繩焼酎なんかをメインで飲ませる小料理屋、そこに移って話を続けようということで、三台ぐらいたくシーに分かれて乗りました。私がここに乗って、こっちが誰だったかな、前の助手席に竹内実君が乗って、その時に私が花田に、「やあ、ベストセラーになったところだったかな」

て話しかけたら、「何だ」って言うから、こういう話が前の月の十一月の初旬かにあつて、「何ぬかすか」と思ったと言ったら、花田はこんな風に言うんですよ。「それは、僕はちよつと別の考え方をする。神吉かんきちは文芸ジャーナリズムでは孤立している。それから君も孤立している。しかし、本来ならば、神吉の出版における仕事、あるいは君の物書きにおける仕事こそ大衆化しなければならぬ。その意味で、君と神吉は結びつくべきであると思う。今からでも考えを変えて、君、その話をやり直したらどうか」と言うからね。それを聞いて、私は、「うーん、なるほど、そういう考え方があるのかなあ、それならば、考え方を切り替えた方がいいのかなあ」と思つて、前の車に乗っていた野間宏に聞いてみたら、「僕も賛成だ。ただし、僕は花田とは違う。他の会社と違つて光文社は金持ちで、君は貧乏人だから、お金の面でプラスになりそうだから賛成する」と言うんだ。

それで、その佐藤君に「先約云々と書いたが、それはこちらで処理するから、ちよつと考えが変わつたから、今からでも良ければ、そつちで出すことに承知する」と伝えて、それで始まつたんだ。

カップ・ノベルス編集長の伊賀弘三良が、私に会つた時に、「光文社はお金のある会社だけれど筆者に注文を付けて書き直させたりする、というような話が本社についてありますが、これは芸術作品ですから決してそんなことは申しません。それから、カップ・ノベルスは推理小説を出すようなイメージがあると思いますが、そうじゃなくて、本当の意味での正しい意味での大衆的な作品を出したいんであつて、決してそんな推理小説を出すだけではありません。ただ、一つだけカップ・ノベルスには挿絵を入れますがよろしいでしょうか」と、こう言うんです。「挿絵は、別に私は、許すも何もないから、結構ですから、入れなさい」ということで、そうして始まつたの。

それで、私も最初は、全く縁もゆかりもない変なことを言うという感じを持つたけれど、花田が言う通り「なるほどな」と。花田は、時々ピントが狂うこともあるけど、そういうことはピシャリつとしての射るものがあつてね、私のほうが、今の点では教えられたようなものですね。

神吉さんと直接会ったことは、一度しかなかった。

山口　そうですか。

大西　家に来ましたからね。子供の見舞いという名目で、やって来て。その頃のお金で応分の物を持って来てくれました。

談話屋開業

大西　だいたい、私はいろんなことをしゃべるので、あまり役に立たないのですがね。

一同　いえいえ。

大西　このことは前にも書いたと思いますが、……私は、ものを書くことは開業したが、しかししゃべることは開業していません。

例えば、お菓子作り職人のところに誰かがお菓子を買いに来て、自分が満足できるお菓子ができてなければ、恐縮して、お詫びするけれど、お菓子作りの座談会をやるからちょっと来てというようなことを言われたら、こちらはただ断るだけで、少しも恐縮しないでしよう。それと同じで、原稿依頼が来て、しかし書くことができなかつたら、非常に恐縮してね、これは済みませんとなるけれども、座談会やら講演やらを頼まれても、それは開業していないのだから、別にすみませんというようなものではない、と、そういうことです。

それにもかかわらず、『週刊読書人』のインタビューは、熱心に頼まれて、こちらも牛に引かれて善光寺参りのような結果になったけど……。

私は、スローモー、スローモーと自分のことを言って来て、事実スローモーなのですが、例えばさいたま市の与野のところでは、天気が良かったか、雨が降ったかということを書こうとして、「今日は朝から

一滴も雨も降らなかつた」と書こうか、「上天気であつた」と書こうか、「日本晴れであつた」と書こうか、それを探し求めてなかなか行き着かないのですね。往々にして行き着かないものだから、結局、それを書かずに終わるんです、結果として。しかし、事柄次第では、その日、雨が降つたか天気であつたかということについて、その表現の是非じゃなくて、その事柄そのものを、何月何日は雨降りであつたかかなかつたか、ということを書き留めておくことが大切であるという場合があるだろう。そうすると、今言つたように表現が気に入らないというようなことで、表現が自分の納得するものにたどり着かないということ、結果として、何月何日は雨が降つたか天気であつたかを記録に残さない、分からなくなるということは良くないと考えるようになった。

それで、少し考えを変えなくてはいけないなあ、その意味では談話屋も少し開業しないとイケないなあ、と、そんな風にこの頃少し自己批判してゐるんですがね。

もちろん、文学芸術、文芸というものが、一方では、「主人持ち」であつてはならないということ、志賀直哉が言つていて、それはその通りだと思ひます。しかし、広い意味では、それとは別に、文学、文芸というものの役割、文字の役割として、どこかに主人持ちであるところがあると思う。責任というものが。それを果たすためには、今の談話屋、このスローモーな人間は、談話屋になることを、ある場合は承認しなくては行けないなあ、この頃少し思つてます。

狩野 　いつ頃からそういう風に思うようになられましたか。

大西 　それは最近ですな。

* * * * *

大西 　来たかいがあつたかな。

山口 ええ、もちろん。

長時間、いろいろなお話をありがとうございました。そろそろお疲れだと思えますので……。

大西 また、それじゃあ、機会があった時に。

山口 いずれまた、是非ともこの続きをお願いします。

(53) 『天路歷程』は安部公房編集の『現代芸術』一九六〇年十月創刊号から翌年五〇六月号まで連載(未完)、後に大幅に増補し『天路の奈落』として一九八四年講談社刊。『現代芸術』は佐々木基一編集の『季刊現代芸術』に続く記録芸術の会の機関誌として、一九六〇年十月から翌年十二月まで発行。(鳥羽)

(54) 初出・単行本ともに一九四八年

(55) 安部公房は一九五六年四月から一九五九年四月まで中野区野方に居住。

(56) 中野重治『日本共産党を語る』(聞き手、杉捷夫・白井吉見、『展望』一九五〇・四)において、杉の《或は日露戦争の事にしても、日本が侵略者であつて、その時受けた屈辱を今度の戦争でそぐのだからという事をスターリンが演説したと云われている》という言葉に対して中野は《しかし、スターリンがそんな演説をしたとすれば、その翌る日から国内政治は出来ないと思うし、そんな事はウソだろうと思うなア》と応じている。

(57) 日本が降伏文書に調印した一九四五年九月二日に行われたスターリンのラジオ演説『同志イ・ヴェ・スターリンの国民に対する挨拶』(翌日の『プラヴダ』紙に掲載)のこと。大西氏が当時読んだ日本共産党東京都委員会宣伝教育部編スターリン『大祖国戦争』(日本共産党東京都委員会出版部、一九五二)に、《一九〇四年の日露戦争の時のロシア軍隊の敗北は、国民の意識に重苦しい想い出を残したのであつた。この敗北はわが国の汚点となつた。わが国民は日本が粉砕され、汚点が一掃される日がくることを信じ、そして待つていた。四〇年間われわれ古い世代の人々は、この日を待つていた。そしてここにその日がきた。本日、日本は自分の敗北を認め、無条件降伏文書に署名した。》(二一四、二一五頁)とある。他にも、例えば、清水邦生訳、スターリン『ソ同盟の偉大な祖国防衛戦争』(国民文庫社、一九五三)に、『国民に対する同志イ・ヴェ・スターリンの呼びかけ』という訳題のもとに収録されている。

(58) 花田清輝は一九五二年四月に『新日本文学』編集長に選ばれ、同年七月号から一九五四年八月号まで編集長を務める。(鳥羽)

(59) 『人民文学』は一九五〇年一月のコミンフォルム批判とその後の日本共産党の分裂に呼応するようにして、同年十一月に創刊された雑誌である。安部公房は一九五二年三月号から寄稿をはじめ、後継誌の『文学の友』一九五四年十月号まで積極的に関わっている。(鳥羽)

(60) 花井太助が運転手をする『飢餓同盟』(講談社、一九五四)、幽霊の「ぼく」たちがトラックで旅をする『変形の記録』(『群像』一九五四・四)、「男」たちが米軍払下げのジープでウェーを探す『奴隸狩』(『文芸』一九五四・十二、一九五五・三)等のことか。安部公

- 房は一九六〇年夏に自動車運転免許証を取り、初めての車を購入した。(鳥羽)
- (61) 綜合文化協会の機関誌として真善美社より一九四七・七〜一九四九・一発行。(鳥羽)
- (62) 『志賀直哉論其三 学習院と渡良瀬川鉞毒事件』(『綜合文化』一九四八・八↓『觀念的発想の陥穽 大西巨人文藝論叢下』立風書房、一九八五)
- (63) 前者は『志賀直哉』(『人間別冊』第三集、一九四八・十二)、後者は『志賀直哉の危機』(『文学会議』第七集、一九四九・四)か。ともに大西論より後の発表だが、杉浦『現代日本の作家』(未来社、一九五六)所収本文末尾の擱筆年月日は前者が一九四八・八・一、後者が一九四八・十・一。(鳥羽)
- (64) 一九四八年五月〜七月
- (65) 杉浦『基地六〇五号』(大日本雄弁会講談社、一九五四)の印税か。(鳥羽)
- (66) 〈第三部運命の章二 十一月の夜の構曳〉「四」〜「六」
- (67) 一九二八〜一九九八
- (68) 『新日本文学』連載分に基づくカップ・ノベルス版『神聖喜劇』の刊行は一九六八年十二月から翌年七月まで。作品として完結を見るのは、一九八〇年四月。『神聖喜劇』完成までの長年にわたる経緯については大高知児『Ⅱ「神聖喜劇」の成立』(『神聖喜劇』の読み方』晩聲社、一九九二)を参照。
- (69) 《夢殿の救世観音を見てみると、その作者といふやうなものとは全く浮んで来ない。それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら、私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思はないだろう。》『現代日本文学全集 志賀直哉集』(改造社、一九二八) 卷頭文↓『現代日本文学全集・志賀直哉集』序』(『志賀直哉全集第六卷』岩波書店、一九九九)
- (70) 大西巨人氏の次男。一九六一年七月誕生。
- (71) 『神聖喜劇』は、一九六〇年十月から『新日本文学』に当初はほぼ毎月、発表。
- (72) 中国文学者。一九二三〜。現在の会などに関わる。(鳥羽)
- (73) 神吉晴夫。一九〇一〜一九七七。光文社でカップ・ブックスを創始。
- (74) 前掲『未完結の問い』二八頁
- (75) 前掲『未完結の問い』のもとになったロング・インタヴュー。『週刊読書人』二〇〇三・五・十六〜二〇〇四・九・三
- (76) 《私の気持から云へば、プロレタリア運動の意識の出て来る所が気になりました。小説が主人持ちである点好みません》、《主人持ちの芸術はどうしても稀薄になると思ひます。》志賀直哉の小林多喜二宛、一九三二年八月七日付け書簡(『文化集団』一九三三・六↓『志賀直哉全集第十八卷』岩波書店、二〇〇〇)